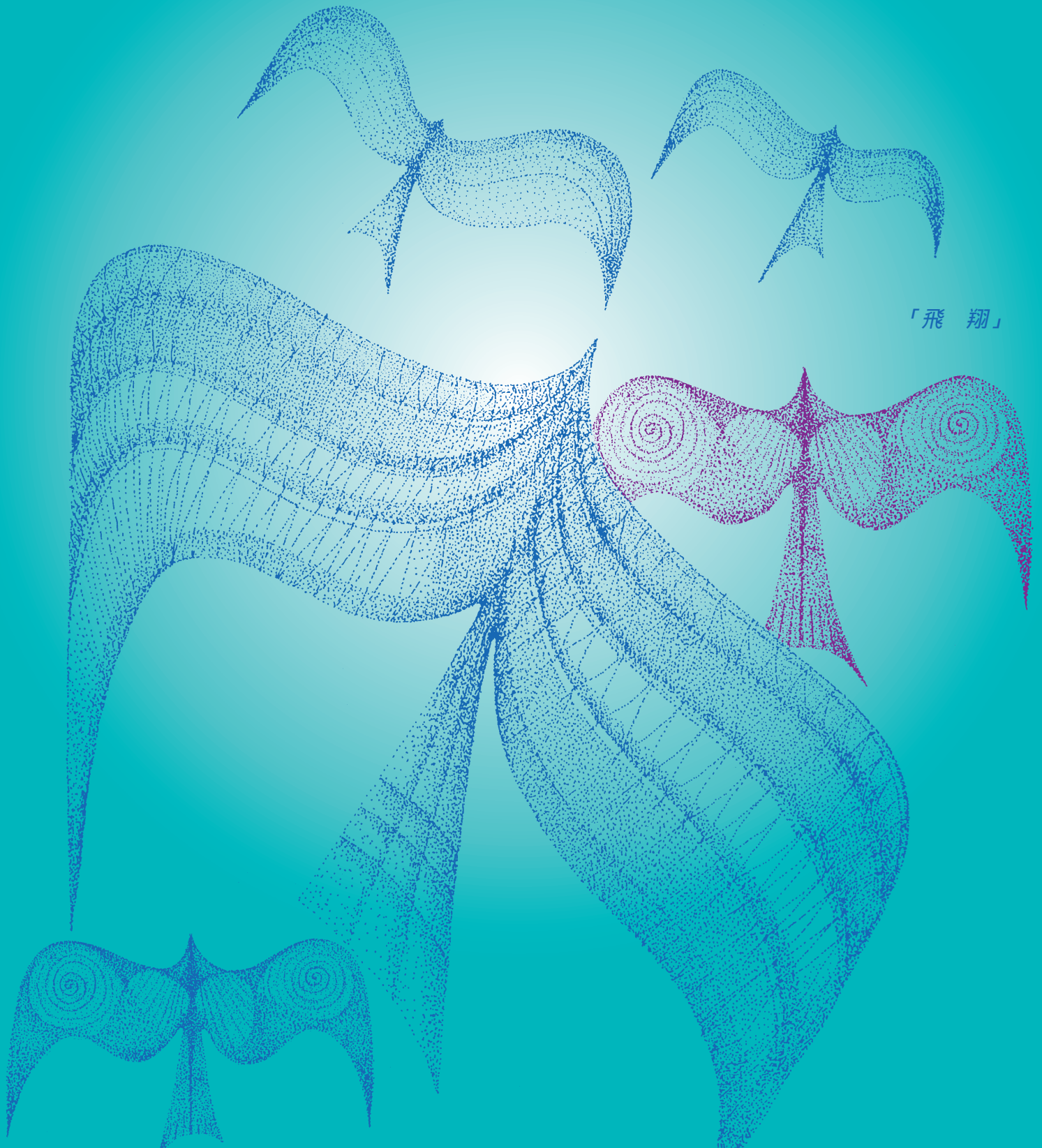


鹿大広報

No.146

Feb/1998

編集・発行
鹿児島大学
広報委員会



「飛翔」

目次

特集 飛 翔

送別の辞	学長 田中 弘允.....	3
卒業・修了にあたって		4
口 美和(法文)	田口佳奈子(法文・院)	高口 康祐(教育)
小湊 博美(教育・院)	蓑部 悦子(理)	松元 拓朗(理・院)
新井見英樹(医)	戈 応濱(医・院)	山田 啓子(歯)
三浦 芳裕(歯・院)	増田 智恵(工)	萩田 忠弘(工・院)
村上万知子(農)	前野 陽一(農・院)	屋理佐子(水産)
野元 聡(水産・院)	飯田 直行(医短)	山内 美穂(医短)
ニルトン ガルシア マレンゴ(連大)	スハイラ イスマイル(工)	
退官にあたって		9
田中 利行(法文)	窪田 昌(法文)	島田 俊秀(教育)
永松 實夫(教育)	森本 雅樹(理)	河野 岩造(医)
西村 茂人(医)	有馬 榮徳(医病)	小片 丘彦(歯)
大串 哲弥(工)	上村 浩(工)	小山田善次郎(工)
片山 忠夫(農)	小崎 格(農)	馬場 威(農)
茶園 正明(水産)	今井 健彦(水産)	中西 正夫(法文)
米森 勉(農)	石原 忍(医短)	大和矢重夫(事務局)
榎本美以子(医病)	松山 賢忠(医)	宮野 久子(工)
帖地 純隆(水)		
学内だより		
国立大学の「独立行政法人」化について	庶務部庶務課	16
工学部で弥生時代の水田跡を発見!	中村 直子	17
開かれた大学をめざそう!	坂田 祐介	18
随 想.....情報公開法と国立大学	下井 康史	19
保 健.....健康教育と定期健康診断	前田 芳夫	20
留学生日記.....鹿児島にきてよかった	郭 華春	21
Once in a Lifetime Experience in a Foreign Country, Japan		
.....ラルフ・リプス・マナ		21
研究室紹介.....超伝導応用プロジェクトへの参画	住吉 文夫	22
学生生活.....『学生生活実態調査報告書』(平成9年度)をかいま見て		
.....金丸 哲		23
新任教官紹介		24
図書館だより		26
編集後記		26

表紙デザイン

退官、卒業と新たな世紀に向う方々を青い鳥に見立て、その飛翔の姿をデザインしました。

教育学部 美術教育構成デザイン 教授 永松實夫

送 別 の 辞

学 長 田 中 弘 允



田 中 学 長

今年も春の訪れと共に退官される教職員並びに卒業生の皆様とお別れの時がやってきました。しかし同時に皆様にとりましては新しい世界へのスタートであり、また残る私共にとりましてはまた新しい時代へのスタートとなります。共に過した日々を想い、そこでなしたことを確認し、明日からの新世界への糧にしたいと存じます。

このたび退官される皆様には、教官あるいは職員として勤務され、教育、研究、診療、大学運営等に大きな努力を払われ、本学の発展にすばらしい貢献をされました。皆さんの御努力に心から感謝申し上げます。

鹿児島大学は昭和24年創立以来49年の長きに亘って約5万余名の卒業生を社会へ送り出し、また国際的研究を創造し、地域社会並びに国際社会への貢献を行なって参りました。最近では、社会の激しい変動に伴う大学改革のニーズに対応し、一貫教育と教養部改組・転換並びに各学部の改編・充実よりなる改革の計画づくりが行なわれ、ついに昨年4月から鹿大は新しく生まれ変わりました。教養部教官は各学部へ移籍し、各学部の教官と協力し合って、新しい教育、研究等に参画しており、学生の一貫教育もスタートしました。このような大きな改革に加えて、今年度はわが国の大事業である行財政改革の計画が作成され、国立大学の設置形態の見直し等も大きな検討課題となりました。私共鹿大でも全国国立大学と共に反対の意志を表明致しました。このように大きな根本課題が提起され、大変忙しい平成9年度でありましたが、いずれも危機を乗り越えることができました。

御退官の皆様が、豊かな経験と指導力を発揮されたことが、鹿大の発展に大きな力となりました。

私共は、21世紀への懸け橋となるこの時期において充実した学生教育、国際的研究を通して社会に貢献するために努力し、必ず実

行致します。どうぞ、学外からのよき批判者、協力者として御指導下さいますようお願い申し上げます。皆様におかれましては、健康に留意されて明日からの新しい生活を充分に楽しめられますよう心からお祈り申し上げます。

平成9年度卒業生の皆さんは、永年の御努力の末ここにめでたく卒業されることになりました。御家族や関係の方々と共に心からお祝い申し上げます。

皆さんは、鹿大のすばらしいキャンパスと情緒豊かな鹿児島島の地で、学問、スポーツ、市民との交流、その他社会活動を通じて多くのことを学び、身につけました。その結果、全く新しい事態に対応できる能力を獲得されました。皆さんが明日から参加するこの国の社会は、地球上の多くの国々がそうであるように次々に変動しつつありますので、社会に貢献するためには皆さんのその能力をフルに発揮する必要があります。鹿大で学んだ卒業生の一人として自分の能力に自信をもって進んで欲しいと思います。新しい課題への挑戦によって更にまた能力は高まるものです。次々に挑戦してみてください。

さて、社会人一年生の皆さんは今後長年に亘って社会へ貢献するわけですが、是非実行してもらいたいことがあります。それは望ましい生活習慣を今から作り上げることです。ここでいう望ましい生活習慣には、まず心身の健康を保つためのものがあります。その中には、規則正しい生活、バランスのとれた3度の食事、適度な運動、十分な睡眠、ストレスの発散などが含まれます。次に、自分のための自由な時間を毎日もちことです。そして自分の時間の一部を、考えること、哲学することに使う習慣をつくってもらいたいと思います。

最後に、退官される教職員と卒業生の皆様の御健康を心から祈念して送別の辞と致します。



□ 美 和

卒業にあたって

卒業にあたってこの4年を振り返ると、法律のイメージもずいぶん変わった。当初法律といえば「憲法」・「刑法」・「民法」というイメージであったが、今では個人の許容量をはるかに越えた法律の広がりには驚いている。

法律は本当におもしろい。3年の後期からゼミナールで民事訴訟法を学習した。訴訟というものがある面、人間社会が顕になる場であり、論理の組立の面白さが味わえると考えたためである。裁判傍聴を通じて、生の争いに触れ、生身の法曹の方と話を交わしていただく機会を得たり、素晴らしい先生のもとで様々な争点の考え方・様々な組立方を学ぶことで、より私法全体の構造が理解できたように思う。

これから大学という温室を出て、社会という荒波に乗出していくが、そこを生きぬく術のベースとなるようなものをこの4年間で手に入れたように思う。これからも法律を学び続けていくつもりである。

(法文学部法学科4年 □ 美和)



田 □ 佳奈子

修了にあたって

鹿大の門を叩いてから、足掛け5年が過ぎようとしている。聴講許可をいただきに、教官の研究室に、コチコチになって伺ったのを思い出す。

この5年間は多事であった。挫けそうになりながらも、様々な助言を戴き、ぼちぼちやってきた。今日に至るまで、私を常に支えてきてくれたのは家族である。そして、苦しい時に励まし(それは御自身にとってはさりげない言葉だったかも知れないが)、時機を得た課題を与えつつ、ここまで導いてくださった先生方にも深く感謝している。また、集中できる場所が殆ど図書館に限られてしまう私にとって、その充実はありがたかった。その他、あおぞら保育園の先生方、無理を聞いて下さった事務の方々、よく声をかけて下さった守衛さん等お世話になった方々にはきりが無い。

自分の到達点には不満が残る。作品自体もまだ読み足りていないし、参考文献もどれ程理解し得たであろうか。まだ執筆中でさえある論文は、読み直す程、不十分な点や間違いが出てくる。この点を除けば、私個人は恵まれてきたし、また恵まれている。自己満足かもしれないが、そう思う日々である。

(人文科学研究科2年 田口佳奈子)



高 □ 康 祐

卒業にあたって

正直な話、私は大学で「これをしよう」というはっきりした目的もなく情性で入学してしまった口であった。そんないい加減な気持ちだったので最初の2年間は特に何の感慨もないまま何となく過ぎていってしまった。

しかし2年目も終わろうかという頃、諸事情から大学に在籍し続けることが経済的に困難となり、退学して職につかねばならなくなる事態が生じてしまった。私はその時になってはじめて「もっと大学で学んでいたい」という自分の本心に気付き、それまで学ばせてもらっているという自覚もなく当り前のようについていた講義のありがたさ、学ぶことのできる幸福を強く実感した。

その後、周囲の人々の励ましや協力のおかげで退学を免れ、今年無事に卒業をむかえることができる。これまで私を支えてくださった人々に感謝すると同時に、大学4年間「学べた」ことにも深く感謝したい。

(教育学部中学校課程4年 高口 康祐)



小 湊 博 美

卒業にあたって

約20年ぶりの学生生活は、私にとってひとつひとつが大変刺激的で、学ぶ楽しさを実感できた日々であった。それは、年齢差や職業差を越えて共に学び会う仲間を得られたことや、大学院の講義法が多岐にわたり、教員の持つ知識を一方的に提供するのではなく、研究者としての先生方と院生とのディスカッションが重視されていたことによる。門外漢の私には、理解できることが少なく「無知」を知らされるが多かったが、物事の意味を汲み取り批判的に見つめることや自分の考えをまとめ表現することを意識できるようになったと思う。ここでのかけがえのない学びは、看護教育や看護に携わるうえで、人を理解し、その人が持つ力を発揮できるように支援していくことに大きく影響していくと確信している。最後に、快くそして温かく受け入れてくださった心理学科の先生方をはじめ学生の皆さん、学ぶ機会を与えてくださった方々に深く感謝いたします。

(教育学研究科2年 小湊 博美)

特集



藪部悦子

4年間を振り返って

日々に追われ何の目標もなく生活していると、あっという間に4年は過ぎ、気付いた時には何も残らない。入学当初、多くの先輩方からそう教え聞かされたのを覚えています。また、そうならないよう努力しようと思ったことも。この4年間は振り返ってみるとまさに、あっという間でした。気の向くまま様々なことに挑戦しては長く続かない、というのが多くの場合で当てはまるのは確かです。周りから見ると何も残っていないように見られるでしょう。しかし一方で、常に静かな時が流れており、その窮屈さを感じる独りの時間は、自己を客観的に省みることのできるものでした。自分の甘さ頼りなさを実感でき、今となっては有意義な時だったと思えます。

結果として、充実していたか否か本当のところは、もっと後になってから分かるでしょう。この4年間で自分の中で浮いたものにならないよう、納得のできるかたちで次につながることを考えています。

(理学部生物学科4年 藪部悦子)



松元拓朗

修了を迎えて

私が鹿児島大学を初めて訪れたのは、3年前の阪神・淡路大震災の後まもなくでした。当時私は他大学を卒業し、滋賀県の小さな町で図書館司書として勤務していましたが、大学院を目指す準備を始めた頃でした。その日の鹿児島は春のようなおだやかな天気、身近に起きた悲しい出来事や将来への不安で沈んでいた気持ちも明るくなれたのを、今でもはっきりと覚えています。

大学院へ入学してからの2年間は、本当にあっという間でした。研究を通して、南九州の各地の火山を巡るという貴重な経験もできました。野外調査・実験などに日々追われながらもなんとか修了を迎えることができるのは、指導して下さった先生方、大学院生・学部生そして職員の方々のおかげです。深く感謝しています。

暖かな気候と人々に恵まれた2年間で学んだ多くの事を、少しでも活かせるようこれからも努力してゆきたいと思います。

(理学研究科2年 松元拓朗)



仁井見英樹

卒業に際して

遂にというか、残念ながらというか、楽しかった(時に苦しかった)学生生活にも終わりが来てしまいました。振り返ってみて、大学生活で何が最も大切だったのか?…医学知識? 血や内蔵にビビらなくなった度胸? 多少、要領よくなったこと?…いや、確かに必要ではありますが、私にとって最も大切だったことは“多くの人との出会い”でした。

互いに助け合いながら試験を乗り越えてきた同級生、御指導して(時に厳しい審判を下して)いただいた先生方、サークルの先輩後輩、ゼミで知り合った全国の医学生、マイアミ留学中に会った人々など、皆とても個人的で面白く、私の学生生活が勿体ない程楽しかったのはこれら数々の素晴らしい出会いのお陰だと思っています。

卒後は新しい出会いを期待しつつ、私自身、相手にとって“出会って良かった”と思われるような医師・人でありたいと思います。

(医学部医学科6年 仁井見英樹)

修了に思う

平成6年2月8日、私は日本政府並びに恩師村田長芳教授の恩恵を持って中国安徽省から、鹿児島大学医学部第二解剖教室に留学し、4月から大学院に入学しました。研究テーマは、消化酵素を分泌する胃の主細胞の個体発生です。

母国では、臨床中心であったため、研究における実験のテクニックは何も分からず。村田先生の“鼻血を出して頑張ってください”の言葉に従って、一生懸命勉強した。現在、いろんな細胞と分子生物学のテクニックを習得し、学位論文も国際レベルの学術誌で掲載され、心より村田教授と教室の先生皆さんに感謝している。

幸せと言うか、辛いと言うか4年間の生活は“光陰矢の如し”であり、修了となった。これからも専門知識はもちろん、日本の文化、歴史並びに日本語も幅広く勉強していきたい。

静かで、綺麗な鹿児島に留学して、誠に良かったと思う。

(医学研究科4年 戈応濱)



戈 応 濱

特集



山田 啓子

卒業にあたって

私が初めて鹿児島に来て、もうすぐ6年がたとうとしています。入学式で火山灰の洗礼を受け、目が痛くて泣きながら帰ったことを昨日のこのように思い出します。

この6年を振り返ってみると、日常の忙しさに追われ、あっという間に通り過ぎてしまった気がします。今思えば、やり残した事も多く、あせりと寂しさのようなものを感じます。大学に入学し、多くの人に出会いました。歯学部には、一度社会に出てから、または他大学を卒業後入学した人も多く、出身地も様々で、色々な考え方に接することができました。臨床実習が始まってからは、実際に患者さんとも接し、患者さんから学ぶ事も多くありました。

長い学生生活に終わりを告げます。しかし、卒業はゴールではなく、新たなスタートであることを忘れないようにしたいと思います。

最後に、お世話になった先生方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(歯学部歯学科6年 山田 啓子)



三浦 芳裕

チャレンジ精神

私は、口腔病理学講座の大学院生として研究や病理診断を中心に仕事をする傍ら、日本陸連の登記選手として、日本の代表選手を選考するような試合にも出場して、世界を相手に活躍するアスリートと同じスタートラインに立つことも経験しました。大学院では、教授をはじめ周りの優秀なスタッフに恵まれ、緊迫感みなぎる雰囲気の中で、知識や技術の習得に心がけました。私をとりまく環境が自分をひとまわり大きく育ててくれた気がするとともに、そのような環境にめぐりあえたことに幸運を感じずにはいられません。己の自主性と人間関係の大切さを痛感しながら大学院の4年間があっという間に過ぎていきました。これからも初心を忘れず、何事にも挑戦する意欲を持ち続けたいと思います。

(歯学研究科4年 三浦 芳裕)



増田 智恵

一期一会

大学4年生。私にとって小学校以来続いてきた学生生活の最終学年となります。最も思い出深く印象に残る1年となりました。

SPI模擬試験から始まり就職活動を経て原子力発電所見学、ゼミ旅行等々、枚挙に暇はありません。これら数多くの出来事を通じて一番の宝となったのが様々な人々との出会いです。ほんのわずかの言葉しか交わさなかった人もいれば人生について夜が更けるまで語り合った人もいますが、勉学に関する事、社会に関する事、人生に関する事、そして遊びに関する事など多くのことを学びました。何となく大学に入学した私が自分の進むべき道を見い出すことができたのも、これら多くの『出会い』の賜物と感じています。

社会に出ればこの1年以上に多くの出会いがあるに違いありません。一瞬の出会いであっても人生の糧となるよう、これからも出会いを大切に生きて行きたいと思います。

(工学部情報工学科4年 増田 智恵)



萩田 忠弘

研究室での3年間を振り返って

私は学部の4年生から修士の2年生の3年間、応用化学工学科の幡手研究室に所属しました。研究室では、先生方の温かい御指導の下、日々研究に取り組んできました。その成果として、化学工学会の主催する学会に4回参加し、発表することが出来ました。その中でも、平成9年11月に韓国で開催されたシンポジウムでは、英語で発表し、大変緊張したのを覚えています。学会で発表することなど入学当時では考えられませんでした。実際に発表した自分の姿を振り返ると、成長した気がします。また、貴重な経験をしたと思います。こうした経験が出来たのは、先生方、研究室の仲間そして周囲の方々のお陰です。皆様の御協力があったから今の自分の姿があるのだと感じています。

これから社会人となりますが、学生生活で学んだことを活かして、また、鹿児島大学の卒業生としての誇りを持って頑張っていきます。

(工学研究科2年 萩田 忠弘)

特集



村上 万知子

3/48の充実感

去年の今頃、私は卒論で忙しそうにしている先輩方を「実に大変そうだけど。まだ1年も先のことだ。」と思って眺めていました。

しかし、同じ立場となった今、その苦勞がやっと分かる気がします。

以前から、4年になったら盆も正月もないと聞かされていましたが、今年はまさにその通りで、元旦から卒論にかかりきりでした。

ところが、不思議とつらいと感じることはなく、むしろ充実感で満たされていたように思われます。

また、その1日で、それだけの充実感を得られたのだから、卒論が仕上がった時は...と考えると今から楽しみです。

大学での4年間、「一体、何をしていたのだろう。」と思うことなく、よく頑張ったと自信を持って言えるように、残りの3か月を大切に過ごしていきたいと思います。

(農学部生物環境学科4年 村上万知子)



前野 陽一

修了するにあたって

私が農業経営経済学を専攻するようになって4年半が過ぎようとしている。この4年半の間に私自身が感じた事は次の通りである。

1つ目は、私達の講座では農村調査というのがあるが、これは農家の方々に直接、話を聞くことによって今、どういう事が問題であるのかが分かり、また調査を通じて自分なりの問題意識を持って研究を行うことができた事である。

2つ目は、日本の農業動向だけに限らず、世界の農業動向についても学べた事である。私は修了と同時に農業関係の仕事に就職するが、これからの時代は、今までよりも世界各国の農業情勢を把握していることが重要になってくると思うので、この学生時代に学んだ蓄積は後々、とても役立つと思う。

他にもいろいろと感じた事はあったが、これらはすべて農業経営経済学講座でしか学ぶことができない事である。私が学んだ4年半は、とても貴重であった。

(農学研究科2年 前野 陽一)



屋 理佐子

わたしの学生生活

わたしは学生生活に不安を感じながらも、思いをはせて入学した。

四年間でこれだけは頑張ったというものを1つ作る

四月中旬からキャンパス生活に入った。これといったサークルはなかったが、取りあえずあるサークルに入った。またアルバイトも大学生なら当然と思い、幾つかの場所で働くことにした。その時はそれでじゅうぶんだと思った。

行き詰まりはそれからしばらくしてやってきた。数多くのことに手を出したため、1つのものに打ちこめず、日々の生活の中で充足感がまったく得られなかった。今風の平均的なライフ・スタイルにあきあきしかかったころである。

ある雑誌に印象的な言葉が載っていた。『我究しよう、そしてもっと本能に忠実になるう』

それを見た瞬間、私の中の何かが変わった。

(水産学部水産学科4年 屋理佐子)

卒業にあたって

水産学部には学部生として4年、修士として2年の計6年間在籍してきたわけだが、その間いろいろなことを経験し学んできた。今、パッと思い付くものをあげていってみると、卒論、修論で学んできた専門知識(魚類の栄養要求、種々の分析方法等)、外国人とのつき合方(黙っていないで単語を並べさえすればなんとか会話はできる)、お酒(自分の限界や、酔っ払いの介抱等)、掃除洗濯、パソコン、パチンコ、車の運転、スキューバダイビング等々その他にもいろいろあるのだが、なによりも大切だったのは、この6年間を通じて知り合った人たちとの出会いだと思う。友人や教官をはじめとし、様々な人と出会い、そして助けられて自分はここまでくることができた。来年からは社会に出て、新しい環境の中での生活がはじまるが、大学で学んできたことを十分に活用し頑張っていきたい。最後にこれまでお世話になった人々に感謝したい「ありがとうございました。」

(水産学研究科2年 野元 聡)



野 元 聡

特集



飯田 直行

また会う日まで

ハードな授業カリキュラムを何とか終了し、ようやく学生生活に区切りをつけようとしている。

3年間の学生生活において、学内外を問わず多くの人と知り合うことができた。様々な相談に気軽に応じてくださった大学や実習地の先生方、酒を酌み交わし、他愛もない話や人生について語り合い、ともに学び、遊んだ仲間たちと出会えたことは、私にとって何物にも変えがたい貴重な財産である。

卒業後、私は理学療法士として社会に旅立つことになる。これから先、自分が学生時代よりも人間として成長したと感ずることがあるだろう。また反対に自分の理学療法士としての能力に限界を感ずることもあるだろう。そんなとき、学生時代に知り合った人たちと再会し、自分の成長を確かめ、悩み事を相談してみたい。それぞれの人生を歩む仲間たちに再会し、昔話に盛り上がる日が訪れるのを今から心待ちにしている。

(医療技術短期大学部理学療法学科3年 飯田 直行)



山内 美穂

第三次性徴期

桜いっぱいに囲まれている学校に感動して、知らない人達の中に交っておっかなびっくり入学式を迎えて、早3年が過ぎた。大学生活に夢を馳せ、「とにかく沢山経験してでっかい人間に変わるうっ。」と誓いを立てたのだが、ではどういう風に変ったか見ていこう。

体型...確かにでっかくなった。(ん!?)。料理...実家では包丁もあまり持たなかった私が冷蔵庫の内の物で研究するようになった。社会勉強...サークルと称してアフター5を覚えた。寮生活...7時以降は家から出なかった私が、夜明けまで友達の部屋で熱く語り、ちょっと感情豊かになった。実習...白衣も板に付いてきた。まあこんなところかなあ。見えない所でももう少し成長していると期待しつつ、この自分をベースに、患者さんに信頼されるナースとなっていきたい。

さあ!一丁やるか-!!と気合いを入れて、元気出して行こう。

でも一番の変化は眉毛の細さかな。

(医療技術短期大学部看護学科3年 山内 美穂)



NILTON GARCIA MARENGONI

日本での生活を振り返って

私は、修士課程と博士課程の5年間を鹿児島で過ごしました。今、博士課程の終了を間近にして、日本での生活を振り返ってみると様々なことがありました。

私は、セラピアの遺伝子についてのバイオテクノロジーの研究をしていました。この研究を行うために、4年間指宿にある鹿児島県水産試験場指宿内水面分場に行きました。鹿児島に来てすぐに、日本人の中に交って実験を始めましたので、日本語や日本の生活に慣れなくて困りました。しかし今考えると、この4年間は日本語など実験以外の勉強ができ、充実していたと思います。ブラジルに帰った際には、日本で経験したことを活かして、今まで以上に努力しようと思います。

最後に、日本滞在中に充実した生活を送ることができたのは、お世話になった方々のおかげだと思います。心から感謝いたします。

(連合農学研究科3年

ニルトン ガルシア マレンゴニ(ブラジル))



SUHAILA ISMAIL

日本の生活

留学の夢が具体的に始まったのは、高校時代に兄から日本での三ヶ月の研修経験を話してもらったから、高校卒業後、留学することにした。日本語を約一年半学んだ後、鹿児島大学に入学した。留学中とにかくいろいろやりたい。まず、日本の習慣を知るため二週間、夏の北海道でホームステイに参加した。それから、旅が好きになった。大学の休みを利用してできるだけ日本中行って見た。学校に通いながらアルバイトをしている。留学生活は楽しいだけではなかった。クラスメイトの90人の内、女性は二人しかいなくてとても寂しかった。でも、「郷に入っては郷に従え」ということわざにならって日本の生活を頑張っている。日本に来てから5年間、あつという間に感じた。先生方、友達、留学生担当の皆様、今まで支えになって下さりお世話になりました。何よりも、このような機会や豊かな経験を与えてくれた神様に感謝します。いつまでもいい日々を送れますように...AMIN

(工学部電気電子学科4年

スハイラ イスマイル(マレーシア))



田中 利行

改組と定年

田園風景の中に囲まれていた鹿児島大学がいつの間にか都市化された大学に変容してきた。昭和40年に文理学部改組で創立された法文学部に赴任してきて以来、とどまることなく続いた学部改組の中で過ごした日々が懐かしい。法文学部と共に誕生した教養部は平成9年3月で解消し、学部一貫教育の名のもとに鹿児島大学は新しく歩み出した。この時期に定年退官を迎えることが出来幸せである。

毎年入学と卒業を繰り返しながら一定の年齢の幅を維持している大学の中で学生と接触していると、いつの間にか年をとるのを忘れ学生の物の見方、考え方、行動力、服装等から世代の交替を汲み取るようになってきた。

大学の改革の波は外圧・内圧の中で渦巻きながら大学の教育・研究の在り方に押し寄せてきた。これから国立大学がどう改革されるか未知数ですが、鹿児島大学の益々のご発展と法文学部のご繁栄を心から祈念し、在職中の皆様のご厚情に厚くお礼を申し上げます。

(法文学部教授 田中 利行)



窪田 昌

《ECCE HOMO》

朝4時鶏が鳴き始める頃、夢仕舞いをしながら頭・心・手・足の順序で軽いストレッチをして布団を抜け出します。冬は星空や遠灯を、夏は桜島や高隈山や開聞岳の稜線を眺めながら、入念に40分程柔軟体操をして近くの坂道を軽くジョギングします。その後鶏舎の掃除と給餌をし、焼き立てのパンと産み立ての卵と取り立ての野菜の朝食を取り、講義、論文の推敲や思索や詩作をしながら1時間30分歩いて、8時には研究室に入ります。夜は訪う人さえなければ9時前後には床に就きます。

休日にはマイコン(私自身)とナチュコン(自然)という生涯バージョンアップし続けるコンピュータを駆使して20種類の果樹、80種類の農作物と懇ろに付き合います。「先進=業績病」の免疫の出来た「自然体」はその儘に、退職後は「週末百姓」から「平日百姓」へ衣更えして、西日を浴びて「農閑期」には山歩きや野巡りを楽しみながらの感のない落(楽)日を送ります。 et tu Brute?

(法文学部教授 窪田 昌)



島田 俊秀

めぐりあい

鹿児島大学に赴任したのは昭和48年4月のことでした。はや20有余年が過ぎ、卒業生諸君が指導主事、教頭、また熟練した教育者として活躍している様子を知るにつけ、教員養成学部勤務したことの喜びと誇りを感じます。私は、前任の東京家政大学(故有光次郎学長、戦後教育改革期の元文部次官)児童学科(学科長故山下俊郎教授、鹿児島出身)で、教員需要の増加を予測して児童教育学科を増設、免許取得の課程認定申請の仕事にも携わってきました。私が赴任して以来の鹿児島大学教育学部は、かつて経験したことのない程、大学院の創設、新課程の設置、学生定員の削減等変化に富んだ時代でした。この時期に、教育・研究、新しい時代の大学・学部の改革に参加でき、大過なく定年退官を迎えることができたのは、多くの教職員の皆様方や学生諸君のご協力の賜物だったと、感謝しております。

最後に、鹿児島大学の発展と教職員の皆様方、学生諸君のご活躍を祈念致しております。

(教育学部教授 島田 俊秀)

バリエーションを乗り越えて

私が赴任して来たのは大学紛争のまっ只中で、企業から来た者にとって一向に内容が掴めずオロオロしたことを覚えています。企業にあっては縦系統は特にはっきりしており、与えられた仕事を只一筋、目的に向かって働けば良かったし、自己の主張は入る隙間はあまりなかったのに較べ、大学では自己の主張を述べる事が出来、皆が我慢強く聴き入る姿に驚きを感じたものです。そこには企業と大学の質の違いがあり各自の意見を述べる機会が平等にあるという自由が確保されていたということでしょうか。一方その自由の中には発言に対する責任があるわけで、私などはここではどのように発言するべきかなど大いに迷ったものです。いや迷いながらここまで来たような気がします。この迷いの多い人間を、今日まで導き助けて下さった皆様方に心から感謝いたします。21世紀は目前です。世紀末には歴史的にもいろいろのことがあります。多くのバリエーションを乗り越えて、遅しく前進して下さることを祈念いたします。

(教育学部教授 永松 實夫)



永松 實夫



森本雅樹

バイオスフェア計画

閉鎖空間で数人の隊員が長期間暮らしてみろという実験が行われました。生態系が働かなかったり、ハプニングはありましたが、最大の困難は人間関係の崩壊だったそうです。有名なバイオスフェア計画です。

5年前鹿大に来て、学問の自治を大学、学部、教授会の自治と狭めて行って閉鎖空間を志向する大学の姿は、知ってはいたが印象的でした。大学は学生が入っては出る、本来開放空間です。鹿大教官の学外での目覚ましい活動を見ても、これが鹿大を開放空間にする力にならないのが不思議でした。

閉鎖志向で情報が管理され、信頼関係は薄くなり、コップの中の嵐に強いが外の権力に弱い体制を生み出しています。自民党の派閥でさえ可能な組織の組み替えが自分の力ではほとんど不可能になっています。

と言っても暮らしてみれば閉鎖空間もいいものです。講義も楽しくやりました。5年間本当にありがとう、そしてさようなら。

(理学部教授 森本 雅樹)



河野岩造

邯鄲の異夢三十年

大学広報というのは『全共闘運動側』の一方向的な宣伝に対抗すべく大学側が考え出した知恵の産物でしたが、現在は全く目的が変換されており、その平和利用に感慨無量です。

紆余曲折があって、私が『空母エンタープライズの佐世保入港』で大荒れ状態の九大から鹿大に転任したのが昭和43年の春でした。丁度30年も経過したことになります。

赴任時はのどかで平穏な鴨池キャンパスでしたが、その頃に日本中の大都市で群発した『全共闘運動』の影響は、間もなく鹿大を浸蝕し、学園は大いに秩序も礼節も乱れましたが、その悪影響は現在でも後を引いていて、未だに『学生諸君の課外活動施設』が劣悪な状態のままです。学園紛争の激しい時に『最後の教官学生課長』を務め、その17年後に学生部長を引き受けて努力しましたが、新しい『課外活動施設』が、お上の規制と一部の学生の突張りの狭間で妥協など生まれることは無く、実現出来なかったのが心残りです。

(医学部教授 河野 岩造)



西村茂人

鹿大の発展を祈って

鹿児島大学医学部助手の辞令を受けたのは昭和36年でした。新制大学発足まもない昭和27年に入学した学生時代を入れると43年間、恩師、先輩、同僚に支えられ無事定年を迎えることになりました。皆様から戴いた御好意に深く感謝致します。伝統ある旧七高の寮で寮生活を始めて十日目に城山大火で焼出され、城山キャンパスで不自由な教養時代を過ごしたことも忘れられません。この大火が火つけとなり、分散していた学部統合の機運が高まり、それに伴って医学部、工学部の国立移管がなされ、大学としての基礎が固められた。さらに歯学部、医療短大の増設、学部改革等それぞれの時代に応じた幾多の改革を経て、総合大学として発展してきました。歴代の学長はじめ教職員が一丸となり尽力された賜と思います。画一的、平等主義の戦後教育のさまざまな弊害から、いま大学は大改革を迫られています。21世紀にふさわしい総合大学として、益々発展することを心から祈りあげます。

(医学部講師 西村 茂人)



有馬榮徳

鹿大の46年間に感謝、再就職

1951年、鹿児島県立大学工学部内医進コース入学以来46年間、鹿大二外科からの九大麻酔科出向中央手術部助手1年余と、二外助手時代UCLA外科出向留学2年間を含み、鹿大に半世紀近くお世話になりました。その間58回の海外学術渡航も体験、鹿大図書館本館へ退官記念に寄贈ずみの、米国Marquis世界人名録Who's Who in the World 1998年第15版に、小生も小児外科医の一人として採録され、これも鹿大関係各位のご教導の賜物と感謝しています。

今後は医学修練、海外渡航の体験を活かし中国第一軍医大学・錦州医学院両客員教授の交流職務も続けながら、外科、消化器外科、消化器病、小児外科等指導医、救急医学認定医、麻酔科標榜医の資格を基礎に、老年医学や管理等も併せて勉強すべく、東北の民間総合医療施設にこの4月から再就職の予定です。

鹿大の皆様方が、本土最南端の地の利を活かしてそれぞれの分野で国際的にもさらなる発展を遂げ、貢献されることを祈念致します。

(E-MAIL:dr8arima@po.synapse.or.jp)

(医学部附属病院講師 有馬 榮徳)

特集



小片 丘彦

さよなら桜ヶ丘

昭和55年以来歯学部在籍し、解剖学と自然人類学を専攻してきました。着任当時の桜ヶ丘は、まだ住宅も小学校も建っていない広々とした眺めでした。歯学部へ曲がる角の現在貯水タンクのある辺りは、見事な花をつける桜の広場で、満開の頃は昼の弁当を広げる人たちの姿が見られたものです。今、桜ヶ丘の台地はびっしりと家が建ち並び、小学校もスーパーストアもあるひとつの地域社会に成長しました。

私は今、退官を前に桜ヶ丘での18年を振り返っています。講義をし、実習を指導し、人類学調査で国外へも出かけ、古人骨の発掘もしてきました。結構いろいろやったじゃないかと自惚れてもみます。けれど、好きなことを勝手にやってきただけだという思いがあります。これから面白くなるのにと残念でもあります。もし、もう一度この人生を繰り返すことができれば、今度はうまくやれるのに。ありがとう歯学部の皆さん。さよなら桜ヶ丘。

(歯学部教授 小片 丘彦)



大串 哲弥

夢を託して

私が鹿児島大学に着任した時には、超伝導研究には欠かせないヘリウム液化機がなかった。超伝導体は今のシリコンに代わりうる唯一の材料であり、又電気抵抗が完全に零という点から大電力用線材としても理想的なものである。そこで理学部の榎屋先生とともに液化機の設置に向けての仕事から始める事になり、やっと実現した。超伝導は1911年にオネスによって発見以来、現在まで約一世紀が経過している。しかしその実用化の糸口はなかなか見い出せなかった。21世紀まで後3年の年月を残す今日になって、どうにか工学の全分野で実用化の糸口がほどけ始めた感じがする。しかし本格的な実用化が開花するのは21世紀になってからであろう。そうこうしている内に私も定年を迎える事になってしまった。今は超伝導研究者が益々鹿大に育ってくれる事をお願いしたい。未だ前途多難だが、夢多きこの工学分野での先生方の御活躍を期待する。

(工学部教授 大串 哲弥)



上村 浩

くじら雲

昭和43年4月に着任した。ほどなく学園紛争の嵐が吹き荒れ、本部4階の大会議室で吊上げの虚しさを味わう。また、世を捨てた若者の棺に三度も付き添った。多くは、補導協委員在任中の悲しい巡り合わせだった。

一方、バス通勤で得た鮮烈な記憶がある。二昔前の初夏。土曜日の昼下がり。法文前バス停で、附属小の女の子3人がいっせいに飛び跳ねていた。「天まであがれ。1、2、3ッ」と。舗装のない地面に、開いた国語の教科書と赤いランドセルを投げ出して。土煙りが舞って、陽を浴びた紙面と紺色の筒スカートを包み、そこに表題の4文字があった。

いつしか、コピー万能の世になったが、学ぶ喜びを学生と共有したい願望は保ってきた。出来映えは自己評価55点ほどか。でも、楽しく、恵まれた30年間であった。このキャンパスと皆さんに深謝している。次の世紀でも、ここに夢が育ち、感動が躍ることを願ってやまない。

(工学部助教授 上村 浩)

退官にあたって

建築家としての仕事を鹿児島大学の退官と共に終るにあたり、その過去を振り返ってみると、その最初は早稲田大学の卒業設計で四苦八苦していた頃を思い出します。

それは伊豆半島に建つ大規模病院付養老院でありましたが、その作業を通して、設計とは調査により現実の矛盾を明らかにし、理想像を構想し、実現可能なアイデアを提案することである、ということを見出しました。

その後、2つの建築事務所をへて鹿児島大学へ来ることが出来、設計指導及び事例の展示作品、採点等により私も多くのものを学びました。

そして、いろんな仕事に直面して、さきの手法できり抜けることが出来ました。

社会はどんどん変化し進歩してゆくとはいいますが、これから卒業しようとする皆さんの参考となれば嬉しく思います。最後に、32年間永い年月にわたって、鹿児島大学の建築学科で多くの先生、職員、学生の熱心で温い方々に囲まれて過ごすことが出来て心より感謝します。

(工学部講師 小山田善次郎)



小山田 善次郎



片山 忠夫

様々な人々との出会い

鹿児島大学において、公私にわたって大きな喜びを与えられた。多様な考え方を持った人々との閑談、様々な立場から話を進める人々との歓談、過去を一切振り向かず、常に将来についてだけ話題を絞る人々との終り無き会話など、時間を超越したことも屡々であった。お会いする機会を重ねるごとに、その人柄に感服することもあったが、初めての出会いでその輪郭が感じ取れる方が遙かに多かったことに気付き、今更ながら驚いている。元来、人柄、人格とは無言のうちに常日頃の立ち振る舞いに滲み出ているのであろう。振り返ってみると、素敵な人柄に引き寄せられたことが、年配の方は勿論のこと、若い人々の場合にも数多く記憶によみがえる。

鹿児島大学は、その構成母体や歴史が極めて多様性に富んでいることが、この様な感動を与えて呉れたものと思われる。時代とともに価値観が如何様に変ろうとも、様々な人々との出会いは、常に新鮮な期待を抱かせる。

(農学部教授 片山 忠夫)



小崎 格

鹿児島大学での5年半

いつの間にか5年半が過ぎて、大学を、鹿児島を去る日がやってきた。人生2度目の退職であるが、いささか感慨深いものがある。

鹿児島に来て、まず桜島の雄大な姿が印象的だった。市内の旧跡では、私学校跡の石垣の弾痕や、まだ健在だった五石橋に感心した。自然の豊かさ、夏の強烈な日差し、冬の暖かさにも感動した。人々の心の広さ、暖かさ、そして時にはその激情にも触れた日々であった。

農林水産省の試験場に長年いた私にとって、大学は自由に研究に没頭できる優雅な所と映っていたが、会議雑用の多さには驚かされた。民主的運営は時間がかかるもので、それも大学の良さと理解するまで少々時間を要した。

最後の2年弱、附属農場長を併任したが、その間にある職員の不祥事が発覚して大騒ぎになった。大学の名誉を傷つけた事はまことに遺憾で、管理者として責任を痛感している。この紙面を借り、お詫びしたい。

鹿大の今後の発展を祈りつつ、お別れする。
(農学部教授 小崎 格)



馬場 威

鹿児島での私

「どちらから?」「オオサカ」、「出張ですか?」「チガウ」、「単身ですか?」「チガイマス」。一昨年5月、鹿大に赴任して以来、約半年以上の間、呑屋やタクシー運転手とまであらゆる処で交された会話である。幸いにも最近ではこのように聞かれることは先ず無い。ヤット市民権を獲得したような気持ちでいる。しかし現在でも、日常生活において「アレッ、何故、自分はここに居るのだろうか?」と、フト思うことがある。本大学についても余りにも知らない部分が多く、まだ実情についてあれこれ論じるまでには到っていない。それ程、日が浅く、まだまだ馴染みが薄いということですが、出張の帰途、最終便で鹿児島空港に着き、リムジンに飛乗り、そこで独特のイントネーションのある鹿児島弁を耳にしたとき、何故かホット安堵するのは一体何なんだろうか? 短い期間でしたが、何故か愛着を感じる鹿児島大学の益々のご発展と皆様方のご健勝を祈念致しております。

(農学部教授 馬場 威)

退官にあたって

42年間を鹿児島大学で過ごしました。この間のことで、今も鮮明に思い出されるのは昭和30年代に実施された“国際インド洋調査”など幾つかの国際海洋調査に練習船がごしま丸、敬天丸に乗船し参加したことです。当時の海洋観測は、まずは体力でした。今では、観測機器は最新の技術が取り入れられ、体力はさほど必要なく、高精度で海洋調査ができます。これまで鹿児島大学の練習船は半世紀にわたり教育に研究に活躍してきましたが、ここに至り縮小を余儀なくされようとしているのはただただ残念です。

さて、新生鹿児島大学は2年目に入ります。大学改革では問題もありましたが、私は学部間の連帯意識は上がったと思っています。これから学長提唱の、全学プロジェクトの有機農業の研究が実り、更に次のプロジェクトへと進み、これらを足掛りに鹿児島大学が全学を挙げて、相互信頼のもとに教育と研究の実績をあげられることを願っております。

(水産学部教授 茶圓 正明)



茶圓 正明



今井 健彦

漁師力学

「専門は？」と聞かれると「漁師による漁師のための漁師力学」と答えることにしていた。人生の出発点が鯨捕りであり、大学における研究分野が漁具力学であったのがその理由である。

網地の流体力学的特性を解明し、コンピュータ・シミュレーションにより、網漁具の基本設計をすることが夢であったが、浅学非才の故、その水準に到達する前に定年退官することになった。

10年前は本学に水産学系の博士課程大学院はなく、漁具学の分野が有るのは北海道大学だけであったため、有能な人材でも修士修了に留めなければならなかった。その頃の3月は、最も憂鬱な月であった。連合農学研究科の設立は、その悩みを解消し、3月を希望に溢れる月に変えてくれた。今年の4月に、頑張る必要のない静かな人生を迎えることになった。半世紀の歴史を持つ鹿児島大学に、35年余の間奉職できたことを誇りとすると共に、支えて下さった方々に心から感謝の意を表明いたします。

(水産学部教授 今井 健彦)



中西 正夫

定年を迎えて

歳月の経つのは早いもので、いつのまにか定年を迎える歳となりました。昭和36年本学に採用され、以来今日があるのもそれぞれの職場においての上司、先輩、同僚、後輩の皆様方にどれだけ支えられたか、感謝の気持ちでいっぱいであります。

顧みますと、在職中のいろいろな出来事が走馬灯のようにかけめぐり、幾つかの起伏がありました。どれもこれも今となれば懐かしい思い出であり、また高度経済成長期の良き時代であったことを幸せに感じています。

しかし今社会は、不景気の風が吹き荒れ、国は莫大な負債をかかえ、大学も財政改革の一環として組織・定員の見直し等を求められており、厳しい時代となって来ました。今後幾多の困難が待ち受けていることと思いますが、これらを乗り越え、21世紀における輝かしい大学であることを祈念してやみません。

お世話になりました皆様方に心から感謝申し上げます。ご健勝をお祈りいたします。

(法文学部事務長 中西 正夫)



米森 勉

定年を迎えて

昭和35年4月、会計課支出係に採用されて以来38年間、鹿児島大学の職員として勤務させて頂きました。その間、医学部附属病院庶務部人事課、医学部、医療技術短期大学部、法文学部、農学部と異動し、それぞれの部局において、周りの温かい支えを頂き多くの思い出を胸に、無事定年を迎えることができました。一般会計から特別会計へ移行した年に医学部附属病院に異動になったこと、法文学部での学部改組や全学ソフトボール大会OBの部優勝、最後の農学部では赴任早々の火事騒ぎや盗難、学部改組等で、時間の過ぎる早さを感じたことでした。私を育てくれた鹿児島大学に対する想いは言葉に尽くせないものがあります。

大学改革を終えた鹿児島大学は、21世紀に向かって新しく再出発したものと思いません。鹿児島大学の益々の発展と、皆様方の今後のご活躍を祈念して退官の挨拶といたします。

(農学部事務長 米森 勉)



石原 忍

思い出す儘に

退官を迎えるに当たって、去来する思い出を辿る時、「禍福は糾へる縄の如し」だとつくづく思います。

大学法案反対を叫ぶ学生との関わり、水産学部のかごしま丸建造、医学部のリハビリテーション講座・センターの設置、農学部の再編、教育学部の修士課程設置、医療短大の4年制保健学科への昇格などの仕事に関わりました。非力ゆえに挫折感の連続でしたが、先生方や同僚の方々の温かい支えで定年までこれました。また、島津日新公の「いろは歌」に「つらしとて恨みかえすな我れ人に報い報いてはてしなき世ぞ」というのがありますが、薩摩の郷中教育を支えたこの「いろは歌」の理念と、取り憑かれてきたラグビー精神とが融合して私の精神の土壌にもなっています。

残照に映えながら底知れぬ煙を噴き上げる桜島に思いを馳せて、若い者たちに是々非々をはっきり言える生き方を今後もして行きたいと思えます。ありがとうございました。

(医療技術短期大学部事務長 石原 忍)

特集



大和矢 重 夫

40年の走馬燈が廻る時

40年、長いようで短く感じる今日この頃であるが、走馬燈の絵を1枚ずつゆっくりと廻してみると、色々なことがその当時の喜怒哀楽を映し出してくれる。

独身時代の神戸大学から鹿児島大学と会計経理ひと筋に過ごして来て、この3月で身を引くことになったが、大学紛争、医学部・附属病院の移転、歯学部独立開設、教養部改組を伴う大学改革等、どれも小生には忘れる事の出来ない色鮮やかな絵ばかりである。

皆様もよくご承知のように、鹿児島大学の前途には難題が山積みされているうえ、第9次定員削減以降、更なる公務員の削減が打ち出されている。

このような時こそ教官・事務官・学生が丸となって協力し、各人が経営者の視点を持って明るく有意義な大学作りに励み、次世代に引き継いでいかれる事を願ってやまない。

今後も当地に残り見守って行きたい。

本当に長いあいだ有難うございました。

(経理部経理課長補佐 大和矢重夫)



榎 本 美以子

大切な思い出一つ

32年余りお世話になった大学病院での思い出に、病院移転という出来事がありました。旧病院最後の別れの日、何にも無い病室に立って感じていました。病故に重く沈んだこもごもの想い、それだけが残り、置き去りにされている。新病院には明るい思いを残したいものと... 新病院の生活が軌道に乗った頃、高橋信次氏の御著書に出会い、高橋佳子氏にトータル人間学を学ぶことで、これまでの人生観、病気観が変わり、病院観も[真を生きるための呼びかけを聞く場所]となり[病は人生からの呼びかけ]病は苦しむ為にのみあるのでは無いことを確信させていただいたのです。今私の中で病院は明るく、苦しいけど幸せ、忙しいけど楽しいと思えるようになっていきます。20数年前の一つの出来事から生まれた、私にとって大切な感じ方、考え方を磁場とし、残していきたいと願っています。感謝です！ 皆様ありがとうございました。

(医学部附属病院看護婦長 榎本美以子)



松 山 賢 忠

定年を迎えるにあたって

26年間の在職中、お世話になりました数多くの方々に心から感謝し、お礼を申し上げます。ご指導ご助言を頂いた職友先生方、ランニングやソフトボールをしたりして精神的・体力的に活力を倍にして下さったグランド仲間、帝王切開による無菌動物作出時に勉強し協力しあったあのメンバー、機械設備の故障時に応急処置と修理を検討して走り回った顔々、労力・事務支援をして頂いた方々の声、姿が今はっきりと思い出されてまいります。

職務は複雑多様で、通常の動物飼育管理と搬入動物の検収検疫、ペアリングや電磁弁の交換、廃棄物の処理等や、特殊な遺伝子を他の系統に導入するバッククロスまで経験しました。しかし、勉強不足や観察不足のため、研究者へ再現性のある正確なデータの得られる環境と動物を供用するという役割が十分に果たせたかなと懸念しています。

最後に、鹿児島大学の益々の発展と皆様方のご活躍とご健勝を祈念致します。

(医学部附属動物実験施設技官 松山 賢忠)

鹿児島大学からのエッセンシャルオイル

30数年前の職場の部屋では木炭が赤々と爆ぜていた。そんな頃から多くの御指導、御鞭撻を戴いた上司・先輩・仲間の方々に感謝いたします。ここに思い出深い言葉を2、3記してみます。K課長 心身共に健康が一番だ、昼時間は鍵を締めて皆外へ出なさい。S事務長 責任は僕が執る、思い切り好きに仕事しなさい、任せろ。S学部長 女性は死ぬまでお洒落しなさい。お洒落の意味が分かりますか。M学長 人間は努力に努力を重ねなければならないが幾ら努力しても成らないこともある、その時は諦めが肝腎だよ。等々、なんと素晴らしいエッセンシャルオイルを沢山戴いたことでしょう。そんな香りを胸に、4月からは家の掃除・整理から始めたい。そして、やさしさと思いやりというふかふかの座布団に座って、ゆったりと第2の人生を考えよう。

本当にありがとうございました。鹿児島大学の益々のご発展と皆様のご健康をお祈りいたします。

(工学部建築学科事務室主任 宮野 久子)



宮 野 久 子

特集



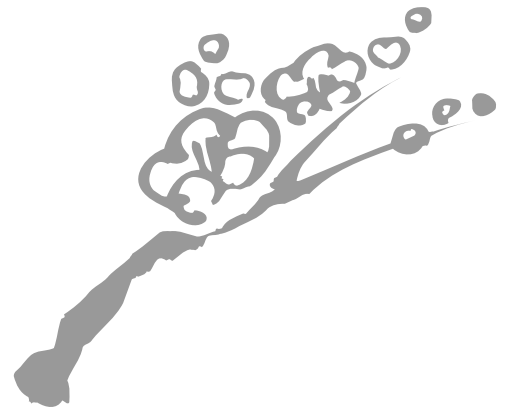
帖地 純隆

36年間を振り返って

外国へ行けると大きな夢を胸にかごしま丸へ乗船する機会に恵まれ、昭和36年12月ニューギニア島ラエの日蝕観測航海を初め、インド洋観測、特定研究等トロール、マグロ操業と遠洋航海では乗船学生も多く魚も釣れて活気に満ち溢れていた。通信はモールスが主役で年賀電報、新聞ニュース等航海の方も天測中心で太陽と星、六分儀片手に航海士、学生と大奮闘、雨の日が続くと大変、科学の進歩は早く現在では衛生を利用したGPS、電話FAX、TLXとボタン1つで連絡出来る。36年間を振り返って、遣り残した仕事が多く後ろ髪引かれる思いですが、船長初め乗組員、学生、教官、事務職員と多くの出会いの中で数々の思い出を心に、良き方々に支えられて今日まで乗船出来た事に心より感謝し、一方この厳しい現状の中、一致団結して21世紀に向けて進んで欲しいと思います。

最後に鹿児島大学の益々の繁栄と皆様の御健康と御多幸をお祈り申し上げます。

(水産学部かごしま丸通信長 帖地 純隆)



この他に以下の方々が平成10年3月31日付けで退官されます。

- 榎屋 廣近 (理学部 物理科学科教授)
- 久米 国幹 (工学部 建築学科助教授)
- 有村 光生 (農学部 生物生産学科講師)
- 山口 次男 (工学部 事務長補佐)
- 新留 邦東 (庶務部企画室 専門職員)
- 萩原 淑子 (理学部 生命化学科事務室主任)
- 田 玲子 (工学部 電気電子工学科事務室主任)
- 谷口三枝子 (工学部 応用化学工学科事務室主任)
- 福留 礼子 (農学部 1号館北学科事務室主任)
- 益山 貢二 (農学部附属家畜病院 文部技官)
- 田中 勝江 (農学部 6号館学科事務室技官)
- 福丸 澄子 (医学部附属病院 看護助手)
- 山神 慶子 (医学部附属病院 看護助手)
- 西村 辰志 (医学部附属病院 検査部技師長)
- 福屋 安保 (医学部附属病院 理学療法室技官)
- 染川 甫彦 (医学部附属病院 検査部洗浄室・滅菌室主任)
- 東 ヨシノ (医学部附属病院 看護婦)

学内だより

国立大学の「独立行政法人」化について

庶務部庶務課

田中学長は、去る10月22日に臨時評議会を開催して、行政改革会議等で議論されようとしている、国立大学の独立行政法人化の問題について審議し、本学の見解をまとめ、次のような声明を同日発表した。

国立大学の「独立行政法人」化について

国立大学を独立行政法人化することについては、国立大学の、我が国及び地域の教育・研究に果たしている役割に鑑み、下記のような問題点があり反対である。

記

1. 現在の国立大学の設置形態については、単なる財政改革の視点からだけでなく、今後の我が国の大学及び大学院における教育・研究の将来構想を策定するなかで決めるべきであると考える。

なお、国立大学の歴史的に果たしてきた役割、現下の内外の情勢等に対応しつつ教育・文化・学問の面での国民の夢を実現していく立場から検討することが重要であり、鹿児島大学も近年諸般の改革努力を重ねてきたところである。

2. 将来に向かって創造力をもつ人材を養成するには、長期的視点に立ち、かつ、多様性を有することが不可欠である。独立行政法人は定型的な業務にこそふさわしく比較的 non-定型業務が多い国立大学の教育研究業務にはなじまない。
3. 地方の国立大学は、地域の生活、文化及び産業と一体となった教育・研究活動（共同研究、地域医療、地域産業）を行っており、これが経済的合理性のなかで阻害されるおそれがある。
4. 地方の国立大学は、地域の経済的に恵まれない若者を広範囲に受け入れており、独立行政法人化されると大学の授業料の値上げを含めて、大学教育への機会均等が阻害されるおそれがある。
5. 地方の国立大学を独立行政法人化し、かつ安定的な研究費・人件費等を確保するためには一定額以上の基金からの収入が保障される必要があるが、現下の状況では困難である。
6. 国立大学の活性化に関しては、厳しい自己点検、外部評価、外部資金の導入や国内外の研究機関、企業等との活発な交流などを積極的に考える必要がある。
さらに現代における諸学問の密接な連関と相互作用については、人文社会科学系と自然科学系の学問の接近と融合という総合性が教育研究の健全な発展を図る上で最も大切である。

国立大学の在り方の検討に当たっては、何よりもまず当事者である国立大学関係者の意見を十分に踏まえるべきであり、そのための手続きを経ないまま性急に多くの問題点をはらむ独立行政法人化を結論とすることには賛成できない。

工学部で弥生時代の水田跡を発見！

埋蔵文化財調査室 中村直子



中村直子

埋蔵文化財調査室では、平成9年6月から11月にかけて鹿児島大学工学部で校舎建設工事に伴う事前の発掘調査を行い、弥生時代中期のものと考えられる水田跡を確認した。鹿児島県では弥生時代のものとしては唯一の遺構である。

弥生時代は、縄文時代までの食物採集段階から食物生産段階へ移行した時代であり、これは大陸から稲作技術が伝わった結果である。稲作技術の導入は、灌漑や水田、農工具など農業技術全体を備えたものであり、同時に、鉄器や青銅器などの金属製品やその技術も導入されている。大陸からみれば新旧入り交じった技術や道具が、ほとんど同時に日本列島にもたらされまた、北部九州を中心として「クニ」が成立し始めることから、政治的な社会変動によって稲作が導入されたと理解できる。

もっともダイレクトにその影響を受けたのは、朝鮮半島に近い北部九州であるが、南部九州はそれとは違った稲作導入のあり方が考古資料の上でうかがえる。縄文時代晩期の遺跡である金峰町下原遺跡では、初痕付き土器が、また同じく金峰町高橋貝塚は、縄文時代晩期から弥生時代前期を主体とする遺跡であるが、初痕付き土器のほか、稲作技術とともに伝わった石庖丁などの大陸系磨製石器が、縄文的な狩猟採集用の石器や骨角器とともに出土している。これは、南部九州でもかなり早い段階から稲作技術が導入されていたことを示しているが、縄文的な道具も同時に使用しているという特徴がある。また、南部九州では、稲作に関する遺物は出土しても、弥生時代の水田跡はこれまで発見されず、シラス台地という風土もあって、細々と稲作を行ってきたというイメージが常につきまとっていた。

今回、鹿児島大学工学部において確認でき

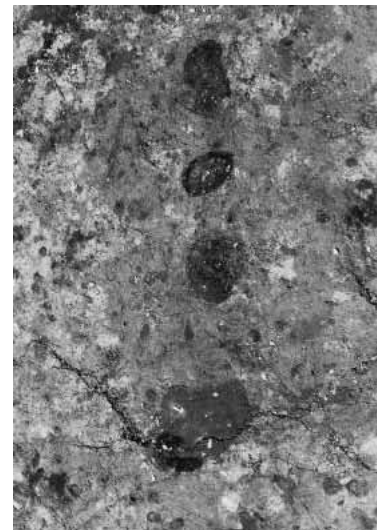


密集した足跡

た水田跡は、畦などによる区画ははっきりと検出できなかったが、水田遺構にみられる稲株跡と呼ばれる直径5cmほどの小さな穴が多数出土し、水路と考えられる溝状遺構や人間の足跡がみついている。足跡は、密集している部分とまばらな部分とがあり、密集している部分がかなりぬかるんでいた様子うかがえること、その境界が直線的に区別できることから、水田の区画をある程度反映しているものと考えている。

過去の発掘調査では、今回の調査区より北側で発見された河川跡の川底から、数百本に及ぶ木杭で構築された弥生時代の水利施設が理学部と工学部の2カ所で出土している。水田遺構の時期は水路跡に埋まっていた土器や遺構の直上の層から出土する土器の形から、弥生時代中期か、それより古いものと考えられ、また、河川跡からはこの時期の多量の土器のほか、石庖丁や木製農具なども発見されている。水田遺構は調査区より東にさらに広がっており、どの程度の規模であったかは現在のところ不明であるが、河川から水を引き、本格的にこの地で水田を営んでいたと考えてよいだろう。

このように、従来の南部九州の弥生時代の稲作のイメージを覆す成果をあげることができたが、河川跡からは肥後地方や筑後地方の土器も出土している。おそらく、これらの地域との物資の交流があったのであろうが、それに伴って、稲作技術に関する最先端の情報ももたらされたのではないかと想像してみたくなる。



稲株跡？

開かれた大学をめざそう！

風致委員会委員長 農学部教授 坂田 祐介



坂田 祐介

鹿児島大学郡元キャンパスについていえば、「ゆとりと潤いのある人間的かつ文化的な環境として再生し、キャンパスのアメニティの向上を図る」という趣旨を持ったここ数年来の環境整備事業（厳密には補正予算による「豊かな屋外環境整備事業」の一環）で、飛躍的！と思える学内整備がなされてきた。この事業は、大学共通経費から不足を補う形で環境整備費を拠出していただき進められたものでもある。正門付近のエントランス空間、農学部から教育学部にかけてのヤシ並木幹線道路沿い、法文学部から工学部にかけてのイチョウ並木沿い、玉利池周辺、キャンパス外周囲障部、あるいは駐車・駐輪場の整備がそうである。

箱物といわれる教育・研究施設とは異なり、緑地・環境は整備が後回しになりがちであるが、この考えははたして正論であろうか。住まいを造るに際して、「家屋が先か、はたまた玄関先を含めた庭が先か？」の論議がなされる場合があるが、低調さにおいてはそれと同じである。双方とも等しく重要で、双方相和合した「住まい」が必要であるように、大学でもバランスのとれた豊かな環境を供給できる大学としてのたたずまいが求められている。そのような意味では、鹿大キャンパスの風致・環境整備事業は、後手をとっているようである。はじめに計画ありき！であった。

鹿児島大学の風致の範囲は、建物、排水溝、駐車場、道路面の整備等の土木・建築工事やモニュメント等の設置、あるいは緑化を対象

とするところにはとどまらない。さらに学内景観を甚だしく壊す恐れのあるものに対する規制・許可について、例えば車道の制限、放置自動車や自転車の処置、不法駐車取締り、騒音規制、ゴミ不法投棄の規制や緑地破壊の禁止等にまで、事業の及ぶ必要がある。なにゆえ？ いまさら？ である。教育・研究の府たる大学の「風致の在り方」の浅薄さを痛感せずにはいられない。

この点、例えばアメリカ合衆国の大学に見られる風致事業の実際は、我々の想像をはるかに越えた所にあり、ほればれとする。もちろん、広大な敷地、豊富な資金、長い歴史を背景にした大学であるので、鹿大と比較することはとてもできないが、「機能した」大学の姿をそこに見ることができる。

朝な夕な散策する市民、木陰に憩い、語り合う学生達、忙しく動き回る教職員、木々の間を渡り歩く小動物。それを可能にするために提供されている諸施設と緑地空間。窓外からは建物内部で行われている教育・研究の現場を窺い知ることはできないが、まわりの雰囲気から察する限りでは、必ずやそこに「大学が存在する」ことを体感できる。学生や教職員、さらには市民にまで開かれた大学の空間に浸ることができる。大学の空間が人を「造っている」場合がある。

明日あるべき鹿児島大学像をめざして、一緒に考え、一緒に行動してみませんか！ いい雰囲気の、開かれた大学空間を創造してみませんか！



構内の中央部に位置する駐車場（ジョージア大学）



農学部教育・研究棟（ジョージア大学）

情報公開法と国立大学

法文学部法政策学科 助教授 下 井 康 史



下 井 康 史

近時、新聞紙上等で「情報公開」という文字を見ぬ日はない。現時点で情報公開を制度化しているのは地方自治体だけだが、今後、特殊法人や自治体の外郭機関といった行政関係団体のみならず、産業廃棄物処理場等の迷惑施設や金融機関のような民間団体にも、制度化の要求が高まろう。国の行政機関については、一昨年(2007)の11月、政府行政改革委員会情報公開部会が情報公開法要綱案を発表、98年度中に立法化の予定である。遅きに失した感強いが、先進諸国の中で最も遅い部類に属す、行革の一環として歓迎されている。制度の対象はあらゆる国家機関に及び、国立大学として例外ではない。

ところで、この制度は従来の行政運営手法を根本から変革しかねない「劇薬」で、その効果は鹿児島県の食糧費激減を見るまでもない。また、公開請求ができる者の範囲には何の制約もなく、利害関係が全くない行政機関の公文書について、自由に公開請求ができる。情報公開法ができれば、外国人であっても、全国立大学全学部全教官の研究費使途内訳公開請求が可能となり、非開示決定に対しては、当該行政機関を被告とした訴訟を起こせる。行政批判の機会が増え、行政側の緊張感はいやがうえでも高まる。なお、上記の要綱案は、非開示決定を審理する第一審裁判所を、当該機関の存在する土地を管轄する地方裁判所とする。日弁連等は、アメリカの例を出して、訴訟を起こした人の居住する土地の地裁を管轄とすべきと批判する。少なくともわが国の現状を考えた場合、いずれが適切なシステムだろうか。国立大学における職員旅費の額などを想起されたい。

さらに、立法化が予定されている情報公開法は、従来の自治体条例よりも文書公開の範囲を拡げている。例えば、制度の対象となる文書の範囲は、決裁や供覧といった文書管理手続を経た文書に限られない。個人的メモの

ようなものを除き、全て開示要否の判断対象となる。また、条例の多くは、審議会議事録等につき、審議会が非開示の議決をすれば、文書の内容如何にかかわらず全面非開示にできるとするのに対し、要綱案はこのようなシステムをはっきりと排除する。教授会議事録も、内容次第では全国に公開されるわけである。勿論、いかなる文書も公開しなければならないわけではない。プライバシー情報はもとより、入試関係の文書等、大学行政上の秘密に関わるものは全て非公開だろう。ただ、判断が微妙なものも多い。文部省に提出する改組の原案はどうか。各教官の個人研究費や科研費の使途内容はどうか積極的に公開すれば、却って同情を惹くかも?。旅行命令伺い書や復命書について、旅行者の官職や個人名も公開すべきか。授業アンケートの結果を各教官の個人名を出して公開すべきか。職員個人名公開の要否は難しい問題である。情報公開法要綱案の示す公開基準は、「慣行として公にされている」かどうかという曖昧なもので、同要綱案と同時に公表された「要綱案の考え方」は、たとえば「中央省庁の課長相当職以上の者」の個人名を公開の例とする。開示の範囲を狭めるものとして、マスコミ等が批判する点である。国立大学の場合、少なくとも授業を担当している講師以上の氏名は、「公開が慣行」であることを否定できまい。いずれにせよ、国立大学においても、開示文書を非開示文書とを仕分けするための基準を作ることが求められる。

これまで、行政法の専門家ヅラして、自治体のやり方を「秘密体質」と批判したり、情報公開裁判判決を解説したりしてきたが、いざ自分自身の情報が公開の対象になるとなると、何となく緊張してしまうのが正直なところである。公開されて困るようなものは全くないのではあるけれども。



健康教育と定期健康診断



前 田 芳 夫

学生への健康教育は保健管理センターの重要な業務の一つです。その目的は、単に学生時代の健康保持にとどまらず、各人が生涯にわたって、己が健康を如何に自己管理していくか、その基本を体得させることにあります。従って、その体得の具現は定期健康診断の受診如何にあるとも言えます。無論、講義や講演等による健康教育も重要です。しかし、健康教育の実践の場とも言うべき定期健康診断が未受診のままでは、折角の健康教育も単なる置の上の水練でしかなく、そこに健康教育が体得された姿はありません。

定期健康診断受診には、このように重要な意味が込められているのですが、その受診状況はとなると、余り芳しくありません。本学の定期健康診断受診率も、かつては90%台を維持していました。しかし、昭和58年度を境に、その後は漸減の一途をたどり、平成6年度には68%にまで低下してしまいました。これは本学が経験した過去最低の受診率です。当保健管理センターでは、急遽、定期健康診断未受診者にアンケートを実施、未受診理由の解明に乗り出す一方、その回答に沿って、全学を挙げて、受診率回復に努めました。その結果、受診率は、平成7年度には69%、翌8年度には77%、そして、9年度には80%と、徐々に回復してきています。

定期健康診断受診は、皆さん方学生の義務です。時代の要請に多少そぐわない点が出てきたとは言え、定期健康診断は、依然として皆さん方学生の健康を守る重要な学校行事なのです。従って、在学中、定期健康診断を受診し、定期健康診断受診を習慣化していくことは、健康を生涯にわたって自己管理していく上で、大変有用なことです。

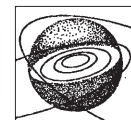
ところで、当保健管理センターでは、平成9年10月7日、8日の両日に、鹿児島市民

保健管理センター 所長 前 田 芳 夫

文化ホールにおいて、第35回全国大学保健管理研究集会を開催しました。この研究集会は文部省が後援し、全国大学保健管理協会が主催して、年1回開催されるもので、大学生の健康管理に関する文字通りの全国学会です。本学会では、慣例として、開催校が共通テーマを掲げますが、今回、当保健管理センターでは、健康教育と定期健康診断を重視する立場から、「健康教育の原点 - 定期健康診断の充実と徹底 -」を共通テーマに掲げました。

大会は、文部省高等教育局より、山中伸一学生課長を、全国大学保健管理協会からは、会長の井村裕夫京都大学総長を迎え、また、全国の国・公・私立大学、短期大学等374校から、約800名の保健管理担当者・研究者の参加を得て、盛大な開会式のもと、講演では、田中弘允本学学長による特別講演「成人病の健康教育」、小路敏彦長崎大学名誉教授による教育講演「生涯教育に視点をおいた学生健康管理の課題」、松山隆美本学医学部教授による教育講演「免疫のしくみとその異常」が、また、シンポジウムでは、「大学における定期健康診断の現状と課題 ~健康白書をめぐって~」と「学生のメンタルヘルスの現状と課題 ~健康白書をめぐって~」が、それぞれシンポジウム、として取り上げられ、更には、数多くの一般研究発表が行われる等、今回の共通テーマに、真にふさわしい、充実した内容で、成功裡にその幕を閉じました。

定期健康診断の受診率低下が叫ばれている昨今、今大会で、「健康教育の原点 - 定期健康診断の充実と徹底 -」を共通テーマに、健康教育と定期健康診断の重要性を、今一度論議し、再確認したことは、極めて有意義であったと思います。



鹿児島にきてよかった

連合農学研究科 郭 華 春(中国)



郭 華 春

1995年10月、私は雲南農業大学の派遣研究員として来日し、農学部林満教授のもとで1年半ジャガイモ生理生態的研究に師事しました。昨年の春、連合農学研究科博士課程へ進学しました。現在、「ジャガイモ栽培における真正種子の利用法の確立に関する研究」というテーマで研究しています。

雲南農業大学は1988年に鹿児島大学農学部と友好交流協定を結びました。私は両校友好往来の橋渡しとして両校友好往来の発展のために力を尽くしています。ひとりの力は小さいですが、ひとつずつ集まると大きな輪になるだろうと思います。中日平和友好条約を結んで20年目にあたり、今後両国の平和と友好を願っています。

鹿児島に来てはやくも2年が過ぎ、鹿児島の山水、風土、人情が大好きになりました。工業化した日本で田園の景色が残る鹿児島のような都市はあまり多くないでしょう。霧島の紅葉、長崎鼻の荒波、朝日が昇る桜島など

の景色は時を忘れるほど美しい。また鹿児島人の熱心さに感激します。二年間、たくさんの日本人からいろいろお世話になりました。「鹿児島で焼酎一杯心酔い」、「鹿児島市 美景いっぱい心酔い」、「薩摩人 熱心いっぱい心酔い」。この「三酔」は私にとって鹿児島の印象になりました。

私はいま国際交流会館に滞在しています。3階の8部屋に6カ国からの留学生が住んでいます。新入者が入るとき、また引越しがあるときはパーティをします。各国の料理を食べて、鹿児島の焼酎を飲んで、日本語で語り、まさに国際交流です。各国の青年と鹿児島で結んだ友情はいつまでも続いていくと信じています。この点でも鹿児島に感謝します。

もちろん、実験がうまくいかないとき、生活費に困るとき、妻子を向こうに残した「単身留学」で、すこし寂しいときもあります。しかし、私は鹿児島にきてよかったと思っています。

Once in a Lifetime Experience in a Foreign Country, Japan

連合農学研究科 ラルフ・リブス・マナ (パプアニューギニア)



RALPH REEVES MANA

If it was not of my mentor, a teacher and a friend I would never be as I am now, a graduate student at the United Graduate School of Agricultural Sciences Kagoshima University. I must acknowledge the endless support of Professor Tatsuro Matsuoka of the Laboratory of Fish Ethology, Faculty of Fisheries Kagoshima University.

All in all, my academic progress is sound and I am looking forward to obtain my Doctoral Degree at early 1999. I will owe it to my ever supportive and flawless Professor Gunzo Kawamura who I think is one of the best teachers I ever come across in my life. His direct manner combined with his intuitive approach in advising on my research matters is amazing.

During World War II, the Japanese Imperial Army fought it's battle against it's enemy at my homeland, the so-called 'the land of the unexpected' Papua New Guinea. Since my grandfather was an officer in the Imperial Army I grew up listening to his wartime stories and naturally, I had this paranoia for the Japanese war histories.

When I first set foot on Narita International Airport (1993) for a three months course at a JICA training center Kanagawa Prefecture, my guard was up ever since. However, when human nature took it's toll rendering my guard null and void, I had some profound educational moments. In Japan one can not be lynched nor robbed off when he/she is conked out by alcohol and lying in the train or on the street unconscious so to say. No one bothers nobody as long as you mind your own damn business. A striking phenomenon that is unheard in both Port Moresby and New York, the two most dangerous cities in the world.

Japan is an ideal place for the foreign students to study in pursue for their higher academic achievements and dreams. It is a peaceful and trouble-free environment that is hardly found anywhere else on the face of this planet.

Only time and experience will reveal the true human spirit of the Japanese people. I became to be a Japanophile!



研究室紹介

超伝導応用プロジェクトへの参画

工学部電気電子工学科電気エネルギー工学講座 教授 住吉文夫



住吉文夫

昨年の暮、「山梨のリニヤ実験線で、超伝導リニヤモーターが時速550kmの世界新記録を樹立!」、「関西電力の大阪発電所で、世界最大の超伝導発電機が7万キロワットの出力試験に成功!」というニュースが流れました。そして今春は、「文部省の核融合科学研究所で、新しい核融合装置の巨大超伝導コイルシステムの運転に成功!」とか、「九州電力の今宿総合試験センターで、超伝導電力貯蔵装置の実験に成功!」というニュースが流れることでしょう。

私達、当講座の電力グループに属するスタッフと学生は、このようなニュースに対して学内で最も敏感でかつ近距離で研究している小集団です。その構成は、教授1、助教授1、技官1/2、事務1、修士8、学部生7です。

ところで、皆さんは「超伝導」という言葉をご存知でしょうか? ニオブ、チタン、ビスマスなど耳慣れない元素と、銅や銀など良く知られた金属とをうまく具合に組合せると、「超伝導の線」ができます。これをコイル状に巻いて、ウイスキー並の値段の液体ヘリウム(零下269度)か、牛乳並みの値段の液体窒素(零下196度)に漬けると、不思議なことに電気抵抗が全くゼロ!になります。そこでこの状態のコイルに電流を流してみます。すると、銅線ではせいぜい1アンペア位しか流せないのに、数百とか数千アンペアといった大電流が楽々と流れます。コイルの両端をショートすると、大電流は永久に流れ続けます。このとき、コイルは強力な電磁石に変身しますので、リニヤモーターの床下に仕掛ければ、重い列車を楽々持ち上げ空中に浮上させます。また、このコイルを水車の軸に取り付けて一緒に回転させると、大出力の発電機となります。燃料が海水から無尽蔵に取れるという核融合発電装置(太陽も同じ原理でエネルギーを放出し続けている)では、一億度以上の人工太陽をこの強力な電磁石の力で装置内に閉じ込めます。また、コイルに永久に流れ続ける大電流は必要に応じて取出

せませすし、充電も直ちにできますから、とても便利な電力貯蔵装置ができます。

皆さんは、私達の小さな研究室が「果たして最先端巨大プロジェクトに寄与できるのだろうか?」とお思いでしょう。実は、「超伝導の線」は、電気抵抗がゼロにも拘わらず使用中に損失を発生し発熱します。このため、冷たい液体ヘリウムや液体窒素が蒸発して目減りしますので常に補給し続けなければなりません。ですから、「どうしたら損失の小さな線が作れるのだろうか?」ということが、どのプロジェクトにとっても重要なテーマなのです。私達はその分野のエキスパートとして、核融合科学研究所、高エネルギー加速器研究機構、電力会社、重電メーカー、線材メーカーなど多くのグループと関わり合いながら研究を進めているのです。

手狭な実験室風景写真の中に、白い縦長の筒状容器(特殊なプラスチック製の魔法ビン、いづれも木枠で倒れないよう固定)を3個見つけられますでしょうか? 向かって右奥が最も大きく、その内径は0.3m深さは2.4mもあります。これらの中に、私達が独自に開発した測定装置がセットされていて、いろんな超伝導の線の特性試験ができます。どの装置も世界のトップレベルの性能を有しておりますから、これまでいくつものプロジェクトにおいて私達の研究室で測ったデータが設計・製作に活用されました。また私達は、理論解析や、新しい「線」の開発も行っています。「鹿児島大学タイプ」と呼ばれる極めて低損失の超伝導の線を夢見て。





『学生生活実態調査報告書』(平成9年度)をかいま見て

補導協議会委員 法文学部教授 金丸 哲



金丸 哲

2年に1度、「学生生活実態調査」のアンケート調査が行われることをご存じだろうか。今年度はその調査の年にあたり、20%の無作為抽出であるので、2割程度の学生諸君に、昨年6月、幸か不幸かご協力いただいたわけである。関係者の一人?として、協力していただいた方にお礼申し上げる。この報告書が、年度末の3月に『第19回学生生活実態調査報告書(平成9年度)』の形でみなさんのお手元に配布される予定であるので、宣伝をかねて、一部その結果を紹介したい。A4判、約150ページの容量で、主に6つの章から構成されているが、その詳細は報告書に譲るとして、ここでは経済生活、住居・食事関係の結果に着目したい。鹿児島大学の学生数9,284名、抽出数1,860名、有効回収数1,162名である。結果的にこの調査では、全学生数のうち約12.5%が回答してくれたことになる。

はじめに、住居の状況別にこの数字を分類してみよう。自宅、学寮、下宿、アパート・マンションの数字は、それぞれ462名、46名、26名、622名となっている。鹿児島大学の学生のうち約4割が自宅から、6割が自宅外から通学していることがわかる。自宅外生のうち、いわゆるまかない付きの、下宿はわずか4%弱で、大半がアパート・マンションの住人である。良きにせよ悪きにせよ、下宿のおばちゃん和下宿生の友好(敵対?)関係はもはやここにはみられない《哀しきかな、私の隣人たちは、3カ月、短い場合は1晩で部屋からの退去を勧告された》。

ついで、この住居別に「1カ月の平均収入と支出」をみると、自宅生の場合収入57,100円、支出49,100円、自宅外生の場合、収入106,600円、支出99,100円である。自宅、自宅外生を比べた場合、収入で49,500円、支出で50,000円の差がある。この額をいかに誰がまかなうかはさておき、自宅外生と、特にその保護者は大変であることが、予想されたこととはいえ痛感される。それでは、

具体的に何に支出されるのだろうか。図は、自宅生、自宅外生別に支出状況を示したものである。住居・光熱費が、自宅外生は約40,000円、支出の32%とほぼ3分の1を占める。ほとんどの学生諸君は、40,000円程度の、バス・トイレ付きのアパート・マンションの住人ということになる。そういえば、大学近辺には、アパートかマンションかは知らないがきれいな建物が多い。10年間の学生時代(そして就職しても)を通じて、1度もバス・トイレ付きの部屋に住むことのかなわなかった私にとっては、ちょっと、いや大いに嫉妬・羨望を感じる《トイレは普通、大学で用を足した。間借りのトイレは緊急避難用。その異臭は、鼻のみならず目につき、滞在時間はカップメンができるまでが限度》。住居の満足度では、75%の学生が満足しているとの回答が得られている。

それでは、学生諸君はこの部屋の中にどのような資産を所有しているのだろうか。この調査では、自宅、自宅外の区別が行われていないので、明瞭な結果が得られないが、テレビ77%、冷蔵庫63%、ビデオ60%、洗濯機55%、パソコン・ワープロに関しては46%と半数近くの学生が所有している。自動車28%、単車29%で、男子学生に限ると、自動車は3分の1、単車は4割弱の学生が所有している(このほかに電話・携帯電話・PHS、エアコン等を調査項目の対象にあげてよいであろう)。

支出費目のうちで、2番目に多いのが食費である。自宅外生の食費は、月30,300円、23%を占める。1日、1,000円見当である。また、表は、自宅生、自宅外生別に、食事のとり方の状況を示したものである。朝食は、自宅外生の半数近くがとっていないのが少々気になる。

いずれにしろ、私の学生時代と比べると、その生活は大きく様変わりしていることはまちがいないが、その負担を考えると……《そして数年後には、私はその負担者の立場に……》

最後に《間借りのおばさんの目に触れないことを念じつつ》。

図 自宅生・自宅外生別支出状況

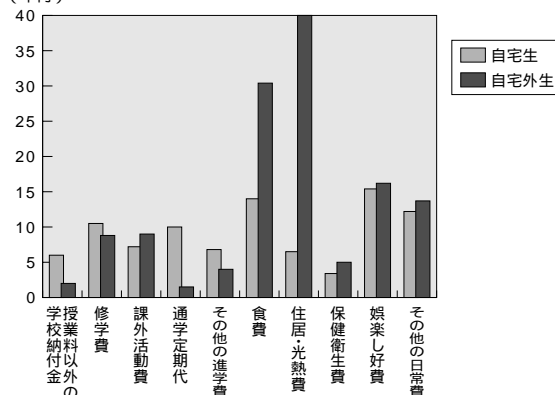


表 食事のとり方 単位: %

	朝食		昼食		夕食	
	自宅生	自宅外生	自宅生	自宅外生	自宅生	自宅外生
自宅	83.3	51.6	14.3	14.7	86.6	65.4
学外食堂	0.0	0.6	13.4	10.5	7.6	20.3
学内食堂	0.0	2.5	50.4	51.7	1.5	4.2
弁当	0.0	1.7	16.9	18.0	3.0	8.8
食べない	15.8	43.4	4.3	4.6	0.4	0.7

新任教官紹介

平成9年7月1日から平成9年12月1日までの間に就任された教官（講師以上）は次のとおりです。

かない しずか
金井 静香（法文学部助教授人文学科）

博士（文学）（生）昭和44年8月19日
（学）京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了
（前）日本学術振興会特別研究員
（担）日本文学史、日本史演習、日本・アジア歴史資料管理学実習



新たな気持ちで研究に取り組むとともに、その成果を活かして教育に頑張っていきたいと考えております。

おおた ゆきお
大田由紀夫（法文学部助教授人文学科）

博士（歴史学）（生）昭和40年11月11日
（学）名古屋大学大学院文学研究科博士課程
（前）日本学術振興会特別研究員
（担）アジア文化史、アジア史演習3、アジア史演習4



新天地で心機一転、教育・研究に励みたいと考えています。

は せ がわ つとむ
長谷川 勉（教育学部教授音楽教育）

芸術学修士（生）昭和24年9月9日
（学）東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程
（前）横浜国立大学非常勤講師
（担）音楽通論、和声学A、対位法、ピアノA B、小学校音楽



教育、研究と地域への貢献をバランス良くやって行ければと思っています。

はっとり こうすけ
服部 鋼資（教育学部教授美術教育）

（生）昭和17年12月3日
（学）愛知学芸大学学芸学部
（前）筑波大学附属小学校教諭
（担）美術科教育、美術教育学、基礎造形D、幼児の造形



美術教育の意義と内容について理論と実践を踏まえた授業を通して美術教育の在り方と実践の具体を学生の皆さんと共に考えていきたいと考えています。

ひぐち あきひこ
樋口 晶彦（教育学部助教授英語教育）

言語学 M.A.
応用言語学 M.Sc（生）昭和27年4月27日
（学）ミシガン大学大学院言語学研究科修士課程
エジソバ大学大学院応用言語学研究科修士課程
（前）鹿児島工業高等専門学校助教
（担）英語科教育、英語科教育演習、英語科教育特殊研究



英語教育学関連の研究領域は、応用言語学的手法に基づいて真摯に取り組んでいきたいと考えています。趣味はスポーツ、男の料理、古典落語鑑賞等です。まだ右も左もわかりませんが、どうぞ宜しく御願致します。

すえなが たかやす
末永 高康（教育学部講師国語教育）

修士（文学）（生）昭和39年9月2日
（学）京都大学大学院文学研究科修士課程
（前）京都大学人文科学研究所非常勤講師
（担）中国文学概論、国語国文学研究法、中国文学講読、中国文学講読



中国の古典を読むことを通じて、自分とは異なる「他者」を理解していくことの面白さを学生達と分かち合っていきたいと思います。

まつい ともあき
松井 智彰（教育学部講師理科教育）

修士（理学）（生）昭和43年6月17日
（学）筑波大学大学院理工学研究科修士課程
（前）なし（大学院生）
（担）地学概論、地学実験、地学演習、地学野外実験



一日も早く鹿児島大学教育学部の構成員としての職務に慣れ、先輩先生方と共に、学生の教育、研究に全力で打ち込みたいと思う。

にしお まさのり
西尾 正則（理学部助教授物理科学科）

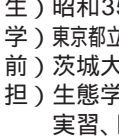
工学博士（生）昭和30年5月25日
（学）名古屋大学大学院工学研究科前期博士課程（電気・電気工学第二及び電子工学専攻）修了
（前）国立天文台電波天文学研究系・助手・太陽高エネルギー現象部門
（担）大学院・地球惑星科学特論



今年度スタートした宇宙コースが軌道に乗り、優秀な学生が社会に出てくれることに貢献できればと思っています。

とみやま きよのり
富山 清升（理学部助教授地球環境科学科）

理学博士
（生）昭和35年12月8日
（学）東京都立大学大学院理学研究科博士課程（生物学専攻）修了
（前）茨城大学助手理学部
（担）生態学基礎、系統分類学実習、環境生物学実習、臨海実習、動物行動学、多様性生物学



野外調査が主な研究です。鹿児島県は奄美大島や屋久島などの離島を抱え、本土にも霧島や大隅半島といった豊かな自然を抱えた地域がたくさんあります。このような自然を対象とした研究をしていく所存です。


くらつ じゅんいち
倉津 純一（医学部教授脳神経外科学講座）

医学博士（生）昭和25年12月18日
（学）熊本大学大学院医学研究科
（前）熊本大学医学部助教授
（担）脳腫瘍、脳血管障害



28年ぶりに鹿児島に帰ってきました。鹿児島を21世紀の脳神経外科の発信基地としたいと考えています。

くろの ゆういち
黒野 祐一 (医学部教授耳鼻咽喉科学講座)
 医学博士 (生) 昭和30年3月24日
 (学) 鹿児島大学医学部
 (前) 大分医科大学医学部助教授
 (担) 頭頸部腫瘍、上気道感染症、
 鼻アレルギー、粘膜免疫




常に国際的な視野と展望をもって臨床そして研究に励み、その面白さを一人でも多くの学生に理解してもらえるよう頑張ります。

たにくち まさこ
谷口 昌子 (歯学部助教授歯科基礎科学講座)
 Doctor of Philosophy (Ph.D.)
 (生) 昭和21年5月6日
 (学) Graduate Theological UnionにおいてPh.D.取得
 西洋、キリスト教、及び仏教倫理学
 (前) アメリカで各種ヴォランティア活動(アメリカ市民を対象とした連続講演レクチャー、各種教育機関、大学、大学院インストラクター等)
 (担) 歯科人間科学、歯科医療の倫理学、倫理英語、一般英語


25年間アメリカで(母親、Ph.D.、教育者、宗教倫理学者等として)学んできた経験が歯科医療を学ぶ鹿大生の人間性開発の一助になるよう願っています。

まつなが やすみつ
松永 安光 (工学部教授建築学科)
 MASTER OF ARCHITECTURE
 (生) 昭和16年11月2日
 (学) ハーヴァード大学大学院デザイン学部(修士課程)修了
 (前) 株式会社近代建築研究所 代表取締役
 (担) 都市システム工学、都市計画、都市設計、建築構法、建築設計製図




国内外において建築および都市設計の実務に30年以上にわたって携わってきた成果を生かしつつ、新たな可能性を教育を通じて見出したい。

ふるかわ よしやす
古川 純康 (工学部教授生体工学科)
 薬学博士
 薬剤師 (生) 昭和11年3月19日
 (学) 東京大学薬学部薬学科卒業
 (前) 医薬コンサルタント
 (担) 工学英語、生化学、生物化学、生化学特論




新設の生体工学科が一日も早く一人立ち出来るよう、また21世紀に花開く新しい技術分野で活躍できる人材を送り出せるよう、微力をつくす所存です。

いわい すみお
岩井 純夫 (農学部教授生物生産学科)
 農学博士 (生) 昭和23年10月13日
 (学) 九州大学大学院農学研究科修士課程
 (前) 日本たばこ(株) 遺伝育種研究所・副所長
 (担) 園芸種苗生産学、蔬菜園芸学特論




企業ではできなかった、じっくりと腰をおつけた研究をしたいですね。また、自分の頭で考えることのできる学生を育てたいですね。

こう とくこう
侯 徳興 (農学部助教授生物資源化学科)
 博士(農学) (生) 昭和34年6月7日
 (学) 鹿児島大学大学院連合農学研究科博士課程
 (前) 理化学研究所共同研究員
 (担) 動物細胞工学、生物化学、動物生化学特論




留学させて頂いた大学でまた教育・研究できることを心から喜んでいます。新たな気持ちで職務を遂行するとともに国際交流にも微力ながら尽力したいと思います。

とくなが まさよし
徳永 正義 (医学部講師公衆衛生学講座)
 医学博士 (生) 昭和22年3月19日
 (学) 昭和大学医学部
 (前) 鹿児島市立病院病理研究検査室部長
 (担) がんの疫学




原爆被爆者における癌発生及びEBウイルスとヒトの癌発生について研究したいと思っています。

かじわら かずみ
梶原 和美 (歯学部講師歯科基礎科学講座)
 教育学修士 (生) 昭和37年2月25日
 (学) 九州大学大学院教育学研究科博士後期課程
 (前) 宮崎医科大学医学部助手
 (担) 歯科人間科学(分担)、歯科医療心理学、私のための心理学、対人関係を考える




歯学の領域での心理学研究の可能性を探索しているところです。学生との出会いも楽しみにしています。

なかやま しげる
中山 茂 (工学部教授情報工学科)
 工学博士 (生) 昭和23年7月22日
 (学) 京都大学大学院工学研究科(博士課程)電子工学専攻修了
 (前) 兵庫教育大学助教授
 (担) 「マルチメディア」「バーチャルリアリティ」「信号処理工学」「応用数学」「電磁気学」




Webメディア情報工学という新しい研究領域を目指して研鑽を重ねて努力したいと考えています。

たかはし ゆきとし
橋 行俊 (工学部教授情報工学科)
 工学博士 (生) 昭和16年5月22日
 (学) 早稲田大学大学院理工学研究科(修士課程)電気工学専攻修了
 (前) 国際電信電話株式会社研究所主幹研究員
 (担) 光情報通信工学特論、信頼性工学、情報電子回路工学、電気磁気学



年々めざましく発展する情報通信分野の生の技術を学生に伝え、彼らの知的好奇心を刺激していきたいと考えています。

つだ かつお
津田 勝男 (農学部助教授生物生産学科)
 農学博士 (生) 昭和32年8月31日
 (学) 九州大学大学院農学研究科博士後期課程
 (前) 福岡県農業総合試験場専門研究員
 (担) 昆虫学、生物的防除論、植物病害虫学概論、昆虫学特論



専門にこだわることなく、農業の奥深さを学生と共に学んでいきたいと思っています。



学術情報データベースの提供について

1. 附属図書館では現在15タイトルのデータベースをネットワーク経由で提供しています。

データベース名	対象分野	備考	
MEDLINE Express 1966 -	医学	ERLシステム	
Biological Abstracts 1989 -	生物学		
Agricola 1984 -	農学		
Wilson Applied Science & Technology Index 1983 -	工学		
Wilson Index to Legal Periodicals 1981 -	法学		
MLA International Bibliography 1981 -	言語学		
ASFA: Aquatic Science & Fisheries Abstracts 1978 -	水産学		
MathScience 1940 -	数学		
ERIC 1966 -	教育学		
PsycLit 1974 -	心理学		
Cross Cultural CD	社会学		
Current Contents. Life Science / Clinical Medicine	生命科学/医学		
医学中央雑誌 1987 -	国内医学		Opti-Netシステム
雑誌記事索引 1990 -	国内雑誌		
ABI / Inform 1971 - 1991			

上記のうち、Current Contentsは、目次速報誌として有名なCurrent Contentsのデータベース版で、次のような特徴があります。

- 1) 検索はタイトル、目次、抄録等からできます。
- 2) 速報性に優れ、更新頻度は毎週です。
- 3) 網羅性に優れ、世界180カ国、7,400タイトルにおよぶ学術雑誌をカバーしています。

編集後記

鹿大広報第145号の編集は巣立ち行く卒業生、修了生、それに大学の発展に寄与いただき、本年ご退官の教官、事務官及び技官の方々に、今後の抱負を語って頂くべく特集を組みました。テーマについて検討の結果『飛翔』とすることに致しました。日本をとりまく社会的・経済的不安定な環境は、巣立ち行く学生にとっては過酷なまでに厳しい試練となるでありましょう。その荒波を乗り越えて突き進む決意の程をお察し下されば幸甚に存じます。

また、今後の鹿大広報のあり方について種々検討し、一般市民へ学内の情報を公開するよう務めるべく、大きく編集方針を転回することを検討しております。その線に沿って、大学での色々な出来事や活動状況、例えば、埋蔵文化財調査室の調査状況、学内の整備状況などについても出来るだけ公表するよう考

4) Medline, Biological Abstracts等の大規模データベースは、データ収録に数カ月を要するという点に比べ、そのタイムラグを補います。

5) Current Contentsを他のデータベースと併せて縦覧検索することで、速報性と網羅性の両方を一度で満たすことができます。

2. オンライン・ジャーナルの検索

オランダのSwets社のオンラインによるフルテキスト論文購読管理サービス、SwetsNetの試行を行なっております。このサービスは世界中の出版社で出版されるオンラインジャーナル約600タイトルのフルテキスト論文データを見ることができるシステムです。現在試行期間ですので600タイトル中30タイトルのフルテキストを無料でアクセスできます。また、13,000タイトル(全分野)のコンテンツ、アブストラクト等の各情報を検索することができます。

* 問合せ先：附属図書館情報サービス課 調査係 (電話 7440)

えております。今後ともご一読賜りますようお願い申し上げます。

(理学部 東 四郎)

広報委員会委員

東 四郎(委員長・評議会) 西中川駿(評議会) 金丸 哲(補導協議会) 石川英昭(法) 永松實夫(教育) 中島正治(理) 出雲周二(医) 大工原菘(歯) 村島定行(工) 秋山邦裕(農) 手島新一(水) 田博文(医短)(印は第146号の編集委員)

鹿大広報 第146号

平成10年2月20日発行

編集・発行

鹿児島大学広報委員会

住所：鹿児島市郡元1丁目21番24号

電話・FAX：099 285 7035・7034

印刷：斯文堂(株)